

## 聖アウグスチヌスに於ける回心の問題（承前）

山 田 晶

### —— 確實性の探究（自覺の知的面） ——

自覺へのプロセスをばその知的面から考察するならばそれは一切の疑はしい知識をば去つて最も確實なる知識にかけり行くことである。何らかの媒介を必要とする知識はすべて不確實である。少くとも絶対確實とはいひ得られない。絶対確實の知識は無媒介の知識でなければならぬ。それはいかなるものであらうか。自覺へのプロセスはこのやうにして一切の知識に懐疑の眼を向け一切の知識をば不確實として否定して行く道である。そして最後にいかなる懐疑によるも否定しきれない眞理がのこつたならばそれは確實なる知識であらう。かゝる知識に到ることが自覺することであるであらう。故に自覺に到るためにひとは必然的に懐疑主義の時代をば通らなければならぬ。それは事實アウグスチヌス自身をもつて通り抜けた茨の道であつた。然しながらそれはあくまでも確知 *evidentia* に到る前段階として否定的契機としてのみ意味を持つものであつて、もしも懐疑主義そのものを肯定する立場にとどまるならばひとはもうそれより一步も先に出ることが出来ない。自覺の一步手前で停止してしまふのである。ところが現實は却つてこの懐疑主義が支配的である。懐疑の圈をつき破つて自覺の世界まで到り得る人はきはめて少数である。然しながら懐疑主義にとゞまることは神への道を絶望することである。絶望は神に對する最大の罪である。懐疑主義の論理的克服といふことが回心後のアウグスチヌスにとつて重大な意味を持つて來るのは當然である。彼はその著書の

隨所に於てそれをくりかへしこゝろみて居るが最も組織的に眞向からそれを問題としたのは彼の最初の著作たる「アカデミア派論」である。彼はこの書の中で先づ人生究極の目標たる淨福 *beatitudo* に到るために人間はいかに生くべきかといふ問題を提起する。意見は二つに分れる。一方は一眞理を見出す *inventio veritatis* まで人間は淨福になり得ないといふ意見と、「眞理の探究」*inquisitio veritatis* の中に人間の淨福はそなはつて居るといふ意見とである。眞理とは知的面から見られたる神に外ならない。従つてこの論争は神を何らかの仕方で自己のものにするまでは人間は眞の淨福になり得ないか、それとも神探究の努力に於て人間は既に救はれて居るといふべきであるか否かといふことに關つてくる。前者はトリゲテウスが後者はリケンテウスが主張し辯護する立場に立つて居るが、結局 *ventio Dei* はアウグスチヌスの立場を *inquisitio Dei* はアカデミア派の懷疑論を代表することはいふまでもない。以下兩者の意見を聞いて行かう。

リケンテウスはいふ。神のみが眞理を見ることが出来る。神ならぬ人間はこの世に於てはたゞこれをどこまでも探究して行く生活が許されて居るだけである。それは既に古の賢者たち（キケロ、ゼノン、カルネアデス等を指す）が教へた道であつた。彼らは感性的慾望から出来るだけはおのれのうちなる最高の部分即ち理性にたよつて瞬時<sup>(1)</sup>もたゆまず努力探究して行く生活こそは淨福の生そのものであるといつた。彼ら賢者たちは疑ひもなく淨福であつた。故に彼らの説即ち眞理探究にこそ淨福の生が存するといふ主張は正しい<sup>(2)</sup>。これに對してトリゲテウスはいふ。なるほど彼らは賢者ではあつたであらうが淨福であつたかどうかは疑問である。探究するとはまだ探究の目標を見出さないことである。目標が発見されたならばもはや探究する必要はない。なぜ探究するか、目標発見のためである。なぜ目標を発見しようとするか、その目標の中に淨福が存在するからである。故に目標をまだ発見せずして発見しよう<sup>(3)</sup>と努力して居る者は「淨福たらんと欲して居る」*velle beatum esse* のであつてまだ「淨福である」*beatum esse* のではない。更に目標たる眞理を発見しないといふことは眞理をまだ所有しないことであり、眞理を所有しないことは

誤つて居ることに外ならない。従つて眞理を探究する限りひとは「たえず誤つて居る」*semper errare* 状態にあるのである。誤つて居る人間は淨福でない、故に探究する限りに於てひとは淨福ではない。これに對してリケンチウスはいふ。たとひ目標に到達しなくても目標に向つて眞直に進んで居る人を誤つて居るといふことは出来ない。誤とは眞理を發見しないことではなくてむしろ眞理ならぬものを眞であると誤斷することである。<sup>(四)</sup>この世に於て眞理をまのあたり見ることは感性的存在たる人間にとつて許されて居ないのであるから何らかの眞理を發見したと考へることを却つて誤である。眞理に向つてわき目もふらずに進んで居る人、即ち完き探究 *perfecte quaerere* に身を委ねて居る人は誤つては居ない、故に淨福であるといはなければならぬ。かくの如くにして兩者の論争はとゞまることを知らない。何故ならば兩者は眞理の見方に對して根本的に異なる立場に立つて議論して居るからである。故に兩者の立場そのものが吟味せられねばならぬ。

(I) *Contra Acad. I c2. n6: Quid ego, ut ad propositum, inquam redeamus, videtur tibi non invento vero beate posse viri, si tantum quaeratur? Rapeto, inquit [Trisetius], sententiam. Illam meam: Minime videtur, Vos, inquam, quid opinamini? Tum Licentius: Mihi prorsus inquit, videtur: nam maiores nostri, quos sapientes beatosque accepimus, eo solo quod verum quaerebat, beateque vixerunt.*

(II) *Contra Acad. I c4 n11: Viximus enim magna mentis tranquillitate, ab omni corporis labe animam vindicantes, et a cupiditatum facibus languisse remoti, dantes, quantum homini licet, operam rationi; hoc est secundum illam divinam partem animi viventes quam beatam vitam esse hesterni inter nos definitione convenit: atque, ut opinor, nihil invenimus, sed tantummodo quaesivimus veritatem. Potest igitur sola inquisitione veritatis, etiam si cum invenire minime possit, homini beata vita contingere.*

(III) *Contra Acad. I c4 n10: Mihi, ait ille, nec secundum rationem vivere, nec beatus omnino quisquis errat, videtur.*

*Errat autem omnis qui semper quaerit, nec invenit.*

(四) *Contra Acad I et II: Error nihil videtur esse falsi pro vero approbato: in quem nullo pacto incidit, qui veritatem quaerendam semper existimat. Falsum enim probare non potest, qui probat nihil, non igitur potest errare: beatus autem facillime esse potest.*

(五) *Contra Acad. I et II: Non autem errat, irquit, cum quaerit; quia ut non errat, perfecte quaerit.*

## II

リケンチウスの口をかりて表現せられたアカデミア派の主張を讀む者はそれが懷疑主義であるとはいへ、決してこの言葉が聯想せしめる如きデカダンスな、乃至は快樂主義的な傾向を帯びるものではないことに直ちに氣づくであらう。彼らの立場は合理主義に根ざせる一種の理想主義なのである。彼らが主張することはこの世に於ては我々は眞なるものを完全に把握することは出来ないといふことである。それが單なる精神としてではなく肉體をもあはせ持つて生れて來た無常不定有限なる人間の運命であると考へられないこともない。故に彼らはこの世に於ける眞理發見を斷念しむしろそのやうなものを望む心をば怠惰なる傾向として斥けひたすらに眞理を探究する努力精進の生活に人生最大の淨福を見出さんとするのである。彼らの人生觀は次の二つの點に要約せられるであらう。<sup>(1)</sup>一、何物もそのあるがまゝに我々によつて知覺せられることはない。*Nihil posse percipi* 何となれば我々の一切の知識は媒介的なるが故に對象そのものを把握して居るとはいひ得られないからである。かくてこの第一の認識論的原理から第二の實踐的格率がたゞちにみちびき出される。二、我々はいかなることがらに對してもこれに同意してはならない。*Nihil rei debere assentire* 何らかのものに同意することはそのものの眞なることをば容認することである。眞であると容認することは何らかの眞理の存在することを前提して居る。この前提は第一の格率に違反するからである。然しながら「同

意しない」ことは「否定する」ことではない。「否定する」ことは「それは真でない」と「容認する」ことである。それもやはり一種の消極的なる是認であつてかゝる同意を行ふこともやはり第一の格率にもとることとなる。故にアカデミア派の立場は是認するのでもなく否認するのでもない、一切の「認」をみとめないのである。一切の判断を差控へるのである。そしてたゞ眞なるものを目指して努力精進するのである。かくの如くアカデミア派の教理を理解するならばこゝにゼノンやカルネアデスやキケロの名に於て代表せられた思想が實は單に彼らだけのものではなく、また彼らの屬して居た一學派に關するだけのものでもなく實に人間の思想史のはじめから現代にいたるまであらゆる時代にあらゆる場所に生きて來た根強い思想であることに直に氣づくであらう。單なる人間理性の限界内に於て自己の行爲を規定すべき規範をもとめようとする限りひとは必然的にアカデミア派にならざるを得ない。その人が道德的な人であるならばそれは努力精進主義になるであらう。反對に快樂的な人ならば感覺主義者にもまた極端なるデカダナスにもなり下り得るであらう。しかも道德主義者はデカダナスを否定することが出來ない。デカダナスも道德主義をわらふことが出來ない。要するに彼らは同一の地盤、即ち合理主義から生ひ育つた兄弟に外ならないからである。合理主義は必然的に相對主義に、相對主義は必然的に懷疑主義に、つひには虛無主義にと發展して行く可能性をうちにふくんで居る。合理主義は人間の合理的良心に自己の行爲に對する一應の納得をあたへる力を持つ。極端にいへば合理主義に立つ限りひとはいかなることをしようとも合理的良心にはおかないといふ立場におかれ得る。故にあらゆる時代の賢者がこの立場に身をおき、この立場に於て道をといた。かくの如き賢者とその思想とは現在もなほいたるところに生きて居るといはなければならぬ。

(1) *Contra Acad.* III. c.10. n.22: *Duo sunt quae ab Academicis dicuntur, contra quae ut valemus, venire institimus,*

(*Nihil posse percipi*) et: (*Nihil rei debere assentire*.)

アウグスチヌスが否定してやまぬのはかゝる合理主義そのものに外ならない。然らばかゝる合理主義はいかにして克服せられるのであらうか。合理主義を克服するのに單なる信仰の立場からこれを否定することは眞の意味での克服とはなり得ない。それは結局知る立場に立つ者と信する立場に立つ者との立場の相違といふことになつてしまふであらう。故に合理主義は合理主義の地盤に於て克服せられねばならない。それはいかにして可能であらうか。

アウグスチヌスはいふ。いかなる確實なる知も不可能だとしてアカデミア派はその立場自身に矛盾を含んで居る。何故ならばひとは何物も確實なるものを知らないといふことを彼らはその教へ自身をば智慧 *sapientia* であるとして居る。そしてかゝる智慧を體得したひとと賢者 *sapientia* であるといつて居る。然しながらもしひとが眞に何物も知らないならば智慧を標榜しこれを教へることも不可能でなければならぬ。何となれば何故生きて居るのかも知らず、いかやうに生きて居るのかも知らず、それどころか生きて居るのかどうかといふことさへ知らないやうなひとを我々は賢者であるといふことは出来ないであらうから。

更に彼らは眞なるものを認識することは出来ないといふが少くとも蓋然的なるもの *probabile* をばみとめざるを得ない。その場合彼らはそのものが眞か僞かのどちらかであることを容認して居る。故に彼らが蓋然的なる存在をみとめる限りそれが眞であることを知らず僞であることも知らないが少くとも眞か僞かのどちらかであるといふことを確實に知つて居る。アウグスチヌスはかゝる撰言的命題の眞理性を更に追求して次の如き例をあげて居る。我々は物理的認識の世界に於てもかゝる撰言的命題の眞理性の實例をば多數に持つて居る。たとへば世界は只一つであるか只一つでないかである。もしも一つでないとするならばそれは數的に有限であるか無限であるかである。我々はそのどちらであるかを知らない。然しながら少くともそのうちのいつれかであることは知つて居る。同様に我々はこの

世界が機械的原因によつてそのやうにあるのかあるひは何らかの攝理によつてそのやうにあるのかのどちらかであることを知つて居る。更にまたこの世界の始原と終末とに關していふならば、世界は無始にはじまり無終にいたるまで永遠に存在するのであるか、あるひは始原は有するが終末は有しないのであるか、あるひは始原は有しないが終末は有するのであるか、あるひは始原も終末も有するのであるか、そのいづれであるかを斷定することは出來ないが少くともそのいづれかであるといふ點に關しては我々の知は確實であるといはなければならぬ。

以上の如くアウグスティヌスは色々の點からアカデミア派の主張の根本にひそむ論理的矛盾性を暴露して見せた。その論駁の要點はつまるところひとが人生に對して何らかの態度をとる限り、その態度が肯定的であれ否定的であれ乃至は懷疑的であれ、いづれにせよ何らかの態度をとる限りはそのひとは何らかのことがらを認めて居なければならぬ。たとひ懷疑するといつても懷疑することを認めるのである。かくて一切の懷疑主義相對主義的態度は自己矛盾にあちいらざるを得ないのである。

- (I) *Contre Acad. III. c.9 n.19: Hoc si ita est, dicendum potius erit, non posse in hominem cadere sapientiam, quam sapientem nescire cur vivat, nescire quemadmodum vivat, nescire utrum vivat.*
- (II) *Contra Acad. III. c.9. n.21: Scimus enim aut veram esse, aut falsum, non igitur nihil scimus,*
- (III) *Contra Acad. III. c.10 n.23.*

#### 四

以上に述べ來つたアカデミア派に對する論駁は彼らの主張のうちに入つて行つてうちからこれをくつがへすといふ方法であつた。即ち彼らの第一の格率 *Nihil inveniri potest* がそれ自身矛盾におち入るといふことを指摘したのであつた。それはたゞ相手の弱點をついただけのことであつてそれだけではその方法は否定的消極的たるをまぬがれな

5. 更に積極的に、單なる *inquisitio veritatis* の立場の否定にとまらせずして *invenio veritatis* の立場の肯定に更にはその立場の強調へと進むためには何らかの意味で「眞理は知られ得る」*Veritas inveniri potest.* とするところが證明せられねばならない。その證明が有名なるアウグスチヌスの直接知即ち自我存在の明證 *evidentia* の問題を形づくるのである<sup>(1)</sup>。

(1) この問題は既に先人によりてくりかへし論究せられた。L. Coutin *Nourrisson La philosophie de St Augustin, tome 2, 1865* ; Boyer, *L'idée de vérité dans la philosophie de St. Augustin, 1920* ; 及び Gilson, *Introduction à l'étude de St.-Augustin, 1929* 以下の叙述もこの三書に負ふものが甚だ多し。

アカデミア派は「いかなる事柄も確實には知られ得ない」といふ。これに對してアウグスチヌスは「確實に知り得ることが少くとも只一つある。それは自我の存在である」と答へる。アウグスチヌスは自我存在の確實性に自己の主張の最後の據點をもとめる。それは *invenio veritatis* を立證する。更にそこから *invenio Dei* の可能性がひらけて来る。自我存在の確實性の發見は自覺に外ならない。自己とは何であるか。自己はいかなる意味で、またいかなるものとして絶對確實なのであらうか。前述の如く自覺への道は自己から自己ならぬもの一切を捨て去つて行くプロセスである。それは知的面から考察するならば自己に屬さない一切の知識をば不確實として自己の知識から排去して行くプロセスである。かくの如くにして一切を排去し去つた後になほ自己に屬する知があるとしたならばそれは確實なる知でなければならぬ。そうしてその如き知に到ることが自覺である。「アカデミア派駁論」につづく第二の對話篇「淨福の生」(事實上は「アカデミア派駁論」第一卷と第二卷との間に出來た書であるからこの二書は同時に書かれたと見てよい)に於てかゝる自己に關する確知は自己が生きて居るといふ事實の確實性であるといはれて居る。同書第七節の人間の身心の關係の論ぜられる箇所にてアウグスチヌスと弟子たちとの間に次の如き對話が行は



れる。

アウグスチヌス「我々が心と肉體とから成立つて居るといふことは君たちに明かであると思はれるか。」すべての人が同意したのにナヴィギウスは「私には分りません」と答へた。そこでアウグスチヌスは彼に向つて、「君は何もかも全然知らぬといふのか。それとも私の今いつたことが君の知らないことがらの中に數へられるのか。——「私は何もかも全然知らないとは思ひません。」——「それでは君の知つて居ることを一つ何でもよいから我々にきかせてくれないかね。」——「出來ます」と彼は答へる。「もしいやでなければ何でもよいから一ついつてくれ給へ。」そこで彼が躊躇するのを見て、「少くとも君が生きて居るといふこと、そのことを君は知つて居るかね。」——「知つて居ます。」——「それでは君は生命を持つて居るといふことは知つて居るわけなんだな。だつて生命がなくては誰も生きられないんだから。」——「え、そのことも知つて居ます。」——「それでは君は肉體を持つて居ることも知つて居る。」彼は同意した。「それではもう君は肉體と心とから出來て居るといふことを知つて居るわけだ。」——「それはまあ知つて居ます。けれどもたゞこの二つから出來て居るのかどうか、それが不確かなのです。」——「それでは君はこの二つのものが存在するといふことは疑はないが、人間が出來上るために何かこれより外のものが必要かどうかその點がはつきりしないといふのだね。」——「その通りです」と彼は答へる。

この對話に於いて明かなる如くアウグスチヌスは弟子たちの懷疑を克服するために疑ひ得ない絶對知からときおこして居る。それは *Scis te vivere* といふことである。即ちたとひどのやうに疑はうとも疑つて居るこの自己が現に生きて居る *ego vivo* としふことを疑ふことは出來ない。従つて「生ける自己が存在するじや」*ego sum vivens* は絶對知である。「私は生きて居る。」これは私の根原的自覺である。この私の根原的自覺は私と理性との對話と題せられた第四の對話篇「獨語録」に於ては「存在する自我」「思考する自我」の確實性としてとらへられて居る。しばしば引用せられる箇所ではあるが非常に重要な箇所であるが故に繁をいとはず引用しよう。同書第二卷第一章に理性と私と

の間に次の如き對話がかはされる。——理性「汝を知りたいと欲する汝は汝が存在するといふことを知つて居るか。」  
 ——アウグスチヌス「知つて居ます。」——「どこから汝はそれを知るか。」——「知りません。」——「汝は自己を單一なるものと考へるか、それとも複雑なるものと考へるか。」——「知りません。」——「汝は動かされるものであることを知るか。」——「知りません。」——「汝は汝が思考することを知るか。」——「知ります。」——「それでは汝が思考するといふことは眞だな。」——「眞<sup>(三)</sup>です」。

「獨語録」は深夜たゞ一人眼覺めたアウグスチヌスが神にひたすらに祈りながら自己と理性との對話をそのままに記録した書である。その中でアウグスチヌスは單に知らないことを知らないとするのみならず不確實なる一切の知を *negatio* の一言のもとに否定し去り、ただこの神と面接した心境に於て絶對確實と思考せられるもののみを *veritas* といつて肯定しようとしてゐた。その彼が絶對疑ひ得ざる眞理として肯定せざるを得なかつたのは「私が存在して居る」といふことと「私が思考して居る」といふことであつた。アウグスチヌスにとつて自己が自己にとつて絶對に疑ひ得ないものを持つといふことは眞理の發見そのものであつた。かくの如くして發見せられた自我存在の眞理性を據點として彼はアカデミア派の懷疑論をば次々と駁論することが出来たのである。然しながらアウグスチヌス本來の目的はおのが外部なるアカデミアの論駁に存したのではなかつた。内なる懷疑主義の克服こそ問題であつた。そして回心といふ體驗を通して確實に獲得せられたる *invenitio veritatis* をば *ego vivans, ego e. gians, ego ans* として把握したところに回心の論理的形成の第一歩がふみ出されたのである。

(ii) *De beata vita n. 7: Scisne, inquam, saltem te vivere? Scio, inquit, Scis ergo habere to vitam? siquidem vivere nemo nisi vita potest. Et hoc, inquit, scio.*

(iii) *Selloqu. II. c. 1 n. 1: R. Cogitare te scis? A. Satis. R. Ergo verum est cogitare te. A. Verum.*

## 五

然しながらかくの如く理性的推論を通り確實なる自我の認識に到達することによつてアウグスチヌスは自覺に達した、乃至は回心を經驗したと考へるのは大きなあやまりであるといはなければならない。事實はまさにその逆である。回心があつてこの論理があるのであつてこの論理があつて回心があるのではない。何故ならばアウグスチヌスの推論を進める者は誰でも自我存在の確實性に到る論理を納得し了解することは出来よう。然しながらそれだからといつて誰でもが自覺するのでもなく回心出来るのでもない。アウグスチヌスの以上の如き推論は回心の一面即ち知的一面にすぎない。アウグスチヌスにとつては確實なる知識に到達することが目標であつたのではない。全身全靈の救済が問題であつた。回心とは全身全靈の建て直しに外ならなかつた。 *inquinatio ventris* から *inventio ventris* への移行は單なる論理的推論の移行の問題ではない。それは立場そのもの、人間存在そのものの變換の問題である。アカデミア派の思想は彼らの存在の平面に於て立派に首尾一貫せる論理性を有することが出来た。彼らから見れば *inventio ventris* は不合理の立場であつた。今や回心を體驗しその自我の全存在の變換を蒙つたアウグスチヌスはその改まつた身心をもつて自らアカデミア派の思考平面にとびこんで行つた。信仰に對する武器は信仰でなければならぬやうに理性に對する武器は理性でなければならぬ。アカデミア派が彼らの思考圈内に於て彼らの論理を持つ以上それを克服しようとして自らこの圈内にとびこんで行つたアウグスチヌスはやはり論理をもつて戦はねばならなかつた。論理をもつて戦ふとは自己の回心の體驗をば論理的に表現し形成することに外ならない。かくて彼の論理は懷疑主義との戦ひのうちに自ら形成されて行つたのである。それは然し單に懷疑主義に對する彼の態度であつたばかりではない。マニ教に對しても其他多くの異端思想に對しても彼は身をもつてその思想の中にとびこみその思想の平面の上で自らの論理を形成して行つた。その際彼を動かす衝動力ともなり論理をみちびく力ともなつたものは彼の回心の體驗

であつた。この事實を無視して彼の思想の發展をばたゞその著書にあらはれた限りの外面的思想から判断しようとする者は彼に關する資料によつて詳細なる外的思想形成史をあむことは出来ようが却つて同心の體驗の重要性をば見落す結果になるのである。アルフアリツクの *L'évolution intellectuelle de Saint Augustin* の如きは非常に詳細に彼の外的思想の形成をあとづけて居てその限りに於てアウグスチヌス研究者にとつて必讀の参考書であるが、マニ教から懷疑主義へ、懷疑主義から新プラトン主義へとその推移のあとを克明にあとづけたがら一つの思想から他の思想へとたえずアウグスチヌスをば驅り立てて行つたものを把握し得なかつたために、彼の同心は徐々に行はれたものであつてミラノの同心はいひ得べくんば新プラトン主義への同心であつたといふ如きあやまれる結論におちいらざるを得なかつたのである。<sup>(一)</sup>

(一) 同書第一卷 p. 399

自我存在の確實性の論證はアウグスチヌス自身にとつても快心の發見であつたのであらう。(デカルトのユギトの發見と同じく) それ故か同じ傾向の論證は後期のいくつかの著書に於ても見出されるのである。<sup>(二)</sup>然しながら最も總括的にかつ豊富にこの問題が論ぜられて居るのは後述する「三位一體論」に於てであらう。即ち同書第十卷に於てアウグスチヌスは自己の本質は何かといふ問題を論じて、「よしや疑つても生きて居る。疑つても疑ふものを記憶して居る。疑つても自己が疑ふことを理解して居る。疑つてもたしかであることを欲して居る。疑つても思考して居る。疑つても自己が知らないといふことを知つて居る。疑つても早急に同意してはならないことを判斷して居る。」<sup>(三)</sup>自己が何であるにせよとにかくこれらのことを「して居る」ものであることだけは疑ふことが出来ない。故に自己とは先づこれらのことを「して居る」存在として確實に把握せられるといつて居る。かくの如くにして初期の對話篇(三八六・七年)に於て存在する自己、生きる自己としてとらへられたものがそれより約十五年の後(四〇〇年)その内

容をはるかに豊富にせられて生けるもの・記憶するもの・理解するもの・欲するもの・思考するもの・知るものとしての自己の確實性として把握せられる。それだけアウグスチヌスの人間分析は細密になつたともいひえられるであらう。だがこれら一切の心のはたらき（人間を人間たらしめるものとしての）はすべてこれを一語に集約するならば「生きる」といふことに還歸せられるであらう。人間として生きるとは理解し・意志し・記憶し・知る等々の作用を行ふことに外ならないのである。その意味で晩年のアウグスチヌスの精緻なる人間分析の基礎は既に十五年前彼がはじめて自己をば「生きる」者として自覺した時にあたへられて居たといふことが出来るであらう。

- (11) *De libris arbitrio* III. c.3 n.7: *De vera religione* XXXIX. 75. *De civitate Dei* c.12 n.21: *De civitate Dei* XI. c.26  
 (12) *De trin.* X. c.10 n.14: *Quandis quindem etiam si dubitat, vivit; si dubitet, meminit; si dubitat, dubitare se intelligit; si dubiat, certus esse quia; si dubiat, cogitat; si dubitet, scit se noscitur; si dubiat, iudicat non se tenere consentit oportet.*

## 六

さて以上の如きアウグスチヌスの思考のプロセスとデカルトのコギトとのおどろくべき類似性及びその關係は既に十分に論じつくされたところであるから今はとかない。たゞデカルトにとつてコギトに集約される彼の自覺が彼の宇宙探究（レゾンにもとづく）の出発点となつたのに對してアウグスチヌスの自覺は自然へ向ふのではなくて直ちに神へ即ち超越的なるものへと轉ずるといふ點が注意せられねばならない。勿論超越に轉ずると同時にアウグスチヌスの眼はたゞちにその立場から宇宙を見直し宇宙に於ける一切を生ずるのであるが。従つてデカルトに於てコギトの發見が自己の理性に對する絶對的なる信頼感をあたへたといふ役割を演じて居るのに對してアウグスチヌスの自覺は神の前に生きる者としての赤裸々なる自己をばあらはにすることを意味して居た。デカルトのコギトが發表された當時ブル

ノーがその思想の既にアウグスチヌスの著作（自由意志論）に見られるを指摘した時にパスカルがデカルトの發見の價値を辯護して「たとひデカルトがアウグスチヌスの著作を読んで居たにしてもそれがデカルトの發見の價値をいささかも減ずる結果にはならない。長きかつ廣きにわたる反省なしにあてすつぼうに一つの言葉を書くといふことこの言葉の中に物質の性質と精神の性質とを區別する稱讚すべき連続した歸結を見出しそれを物理學の不變の原理とすることは全然ことなる」といつたといふことは周知の如くである。たしかにデカルトがゴギトに哲學の出發點を見出したといふことは哲學史上抹消し得ざる功績であるであらう。然しながらそれだからといつてアウグスチヌスの言葉が單なるあてすつぼう a *l'aveu* de であつたとは考へられない。彼にとつて生きるといふことは存在することであり理解することであり知り意志し愛する等のことでもあつたのである。そしてアウグスチヌスに於ては思惟する私の發見ではなくて生きて居る私の發見こそは問題であつたのである。然しながらアウグスチヌスの自覺の中にデカルトへ更にフツセルへと發展すべきものがひそんで居ることは否みがたい。アウグスチヌスは一方に於て深い愛の人であるとともに他方に於て鋭い知的直觀の人であつた。彼の知的直觀がデカルトに受けつがれて（たとひ直接的にはないにしても）スコラの *vincibilis* な知識に對して確實なる *certum* にもとづくデカルト哲學體系を樹立せしめ（その意味でアウグスチヌスは中世哲學をうち建てた人であると同時にこれをうちこはした人であるともいへよう）又その知的直觀がフツセルにうけつがれて一切の相對主義歴史主義心理主義に對する彼獨自の現象學を樹立せしめたといふことが出来るかも知れない。この思想を上にかのぼるならばアウグスチヌスはプロチノスを通してプラトンに通ずるといふべきである。要するにこれはヨーロッパの學問を流れるプラトニズムの傳統なのである。然しながらアウグスチヌスをば單にかくの如き面からのみ見ることはアウグスチヌスの全貌を理解することにはならない。否却つてアウグスチヌスの本質をそこなふ結果となるであらう。アウグスチヌスの本質はどこまでも基督者なることに存する。自覺は神への前段階にすぎない。「私が在る」といふことは單に「私が在る」といふことではなくて「私は神に

於て在る」といふことである。生きて居る自己の發見も同様に神に於て生きて居る自己の發見である。かくの如く神の世界へ入ること、即ち超越をまつてはじめて自覺の意義は全うせられるのである。(但しこの場合超越といふことをカント的に考へてはならない。カントに於て自己を超越するものは *transcendentales Ich*、即ちどこまでも自我である。然しアウグスチヌスに於て超越するものはどこまでも神であつていかなる意味に於ても自我ではない。アウグスチヌスを、そうして中世哲學を近代的に解釋するとはたとえ意識しないにしても實はカントの立場に於て解釋することである。その限り我々は絶対にアウグスチヌスそのものを理解することは出来ない。) そのやうな意味に於てアウグスチヌスの自覺の精神はデカルトよりもむしろパスカルに於て生かされて居るといふことが出来るであらう。デカルトは一切を疑ひ去つた後につひに *Je pense, donc je suis*、に於て彼の *Le premier principe de la philosophie* を見出した。<sup>(三)</sup> 彼の前にはレゾンをもつて一歩一歩征服して行くべき無限大なる自然 *nature* の世界がひらけた。我々はこの世界の前に立つて得意と歡喜との絶頂にあるデカルトの風貌をば想像することが出来る。これに對してパスカルの自覺は運命におびえる「一本の葦」としての自覺であつた。しかもその葦は「考へる葦」*roseau pensant* としてのみ神につながり神につながるることによつて却つて全宇宙を自らのうちにつくむことが出来た。デカルトの自覺は自然に面して居る。パスカルの自覺は神に面して居る。アウグスチヌスの自覺はこの兩面をば自らのうちにふくんで居たといひ得ないであらうか。

(未完)

(一) この點に關しては Gilson, *introduction* p. 50 註に研究の概説がのせられて居る。

(二) Pascal, *Pensées et opuscules* (Brunschwig) p. 113. なおこの問題に關し長澤譯「シルソン、アウグスチヌスの形而上學の將來」(哲學研究、昭和七年)及び長澤「確實性」(哲學研究、昭和二十一年)參照。

(三) Descartes, *Discours de la méthode* (Gilson, 1926) p. 32